

<学会記録>当科における障害児歯科治療の実態(東日本学園大学歯学会第2回学術大会)

著者名(日)	中村 俊雄, 渡部 茂, 伊藤 総一郎, 五十嵐 清治, 大友 文夫, 新家 昇
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	3
号	1
ページ	111
発行年	1984-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007109/

が、他の医院などで塗布の経験の有したのもいたかも知れないが、今回の調査ではフッ素塗布を考慮に入っていない。

質 問 五十嵐清治(小児歯科)

摂取した飲料水や菓子類の種類の相違がう蝕罹患率 df 者率, df 歯率に影響を与えているが、調査結果から演者はどのように考えているのか。

回 答 畑 良明(保存・Ⅱ)

以前より、Bibby, Lundqvist らによって、潜在脱灰能、う蝕誘発能などが明らかにされているが、口腔内に発現

したう蝕がそれらによって計れるものではなく、増々、多様化する食生活において、かなり以前よりその食品に inprint されていたと考えている。

質 問 金子久幸(口腔衛生)

調査対象グループの衛生思想及び歯口清掃の実行などの背景はどの様でしたか。

回 答 畑 良明(保存・Ⅱ)

調査対象グループの口腔衛生指導は1才時の時点で行ったが、それが実際に母親が子供に対して行っているかは調査しておりません。

12. 当科における障害児歯科治療の実態

中村俊雄, 渡部 茂, 伊藤総一郎,
五十嵐清治, 大友文夫*, 新家 昇*
(小児歯科, *歯科麻酔)

道内において、障害児者を対象にした歯科医療機関は、その数規模において、まだまだ不足しており、内容的にも充実しているとはいいがたく、患者の needs を満たすだけの体制作りはできていないのが現状である。

したがって本学付属病院は、地域住民に対する歯科医療はもとより、これら障害児者に対する歯科医療についても、関係者から大きな期待が寄せられており、今後十分なる対応が望まれている。

そこで今回我々は、今後の対策を検討するために、当科に来院した障害児者で、昭和53年4月より昭和58年9月までに受診し治療をうけた50名について資料を集計し検討した。

〔結果〕 1. 来院患者50名中、男子35名、女子15名で、年齢範囲は3才～15才でありほとんどが在宅児であった。

2. 患者の主病名別分類では精神薄弱、脳性麻痺、てんかんなどの中枢神経系の障害、神経筋系の疾患のあるものが32名、情緒障害等の自閉症児が9名、その他感覚器障害2名、血液疾患3名、ネフローゼ症候群等の慢性疾患2名、心臓疾患1名であった。 3. 乳歯の被検歯総数は599歯で、def 者率は男女共に100%, def 歯率は男子58.87%, 女子56.93%, 一人平均齲蝕歯数は、男子8.50, 女子7.09であった。永久歯の被検歯総数497歯で、DMF 者率は100%, DMF 歯率は、男子35.83%, 女子53.43%, 一人平均 DMF 歯数は、男子4.77, 女子9.90

であった。 4. 外来での治療を行った者は、のべ人数26名で、抜歯54歯、修復処置105歯、サホライドによる齲蝕進行抑制処置43歯であった。また全身麻酔下で処置を行った33名45例では、抜歯136歯、歯冠修復370歯、歯髄処置58歯であった。

治療後は、定期的に予後管理を行っているが、障害がある故に通院に支障を来し、定期診査からもれる者も出てきており、今後これらの資料をもとに、より良い体制作りを検討する予定です。

質 問 井藤信義(口腔衛生)

乳歯の齲蝕発生の集計に dmf 指数を用いられたことに何か特別の意味がありますか。

回 答 中村俊雄(小児歯科)

要抜歯の乳歯も含んでいるため。

(障害児は当科を受診するまで歯科治療を全く受けていないことが多く年齢で15才以上になっても乳歯の晩期残存が認められる。このためこれらの実態も調査の対象とした)

質 問 加藤 漣(保存・Ⅰ)

アフターケアでの来院率がわかりましたら、お教え下さい。

回 答 中村俊雄(小児歯科)

50名中3名ほどが来院しなくなっている。